

## 正倉院拜觀の所感

黒田清輝氏談

正倉院の御物を拜觀して先づ第一に感じたことは、拜觀前に想像して居たのとは違つて品物の種類の甚だ多かつたことである。

種々様々の樂器や、伎樂面や、文房具や、遊戲具や、衣冠裝束や、杖だの履だのや、屏風、椅子などの家具類や、火鉢や、飲食器や、劍、鉞、弓箭其他の武器や、鞍、鎧其他の馬具や、それから經卷の類や佛教の道具や、農業、工業の道具まで其種類の多いのに驚いた、そしてそれ等が、種々の珍しい木材や金屬や、寶石牙角其他の材料を使つてあつて、又た象筩や末金鏤や密陀繪や、彫刻や、其他種々精巧緻密な細工で、立派に裝飾が施してあるのである。

それ等の多くの品物を見て、第二に感ずることは、其様式が純粹なる日本的と云ふよりは、世界的のものであると云ふことである。希臘風もある波斯風もある、印度風もある、勿論支那朝鮮の風もある様に思はれる。當時の文明の状態も想はれて興味の深いことである。

記憶に残つて居るものを二二つ擧げて見れば例へば大理石の火鉢がある、それに取り付けてある獅子の形などは面白い、五足の獅子が火鉢の底へ獅噛み付いて、それが五つの脚になつて居る、其獅子の形は普通の獅噛火鉢の様に、獅子の首だけ外向に付いてるのは、全然異がふ、獅子の全身が取付けてある、其形が大に面白いそれは

ブロンズだが、大理石の火鉢と能く調和して居る。

私の特に面白いと思つたのは、伎楽面で、其數も非常に多い。其彫刻は希臘面などよりも巧みなもので、全然寫生とは云へない、頗る寫生的なもので、若し之に全身が付いて居れば、實に立派な彫刻で、骨格にも形にも申分がなくて、そして思切つた誇張も加へてある。東大寺の大佛開眼供養の時に盛んな伎樂の演舞があつて、其時用ゐられたのが多いのだそうだから、千有餘年前に、こんな立派な彫刻があつたことは愉快なことだと思ふ。

樂器なども西洋風を帶びたものがある。鏡は暗くて模様は見えなかつたが支那風と思はれた。物尺などは、象牙の材で、全體に模様が彫つてある、若し目が切つてなかつたら、物尺とは氣付かぬ位である、總ての器物に斯う云ふ風に、立派な裝飾を施してあるものが多い。

丁度我邦の現今の様に、西歐の文明が混入して居る過渡の時代の室内裝飾には、そのままに應用しても差支がないかと思はれる様なものが、中々多い。

御倉は三棟に分れて居て、北と南は「あぜ倉」で、三角の材木を横に積み重ねて、隅で交叉して組合せてある。中倉は普通の平板で周圍が張つてある。此の中倉は北倉南倉よりも後れて建てられたのである。内部は二階になつて居る、床の板などは鉋が掛つて居ない。

壁に沿ふて硝子張りの陳列棚があつて、その内に御物が陳列してある。光線は入口の一方から來るのみであるから、中は暗薄くて充分に見られなかつた。それに初めての事であり、先に立つて説明する役人の後に付いて見て廻るので、多少氣急ぎの心持で、緩くり見る氣になれなかつた。美術上なり、時代の文明なり、故實なりを調べでもするに

は、年々引續いて拜觀して充分に研究しなくてはいかぬ。今度は單に概略の拜觀に止まつたのである。(文責在記者)

『美術新報』二十四 大正二年二月六日

日記によれば、黒田が正倉院にて御物を拝觀したのは大正元年一月一〇日である(『黒田清輝日記』第三卷)。勅封で知られる正倉院だが、明治初年に催された奈良博覧会で宝物が一般に公開、その後は保護を理由に正倉院宝庫の中に陳列戸棚を設けて陳列、明治二十六年に曝涼の制を立てて外邦貴紳の来訪に備え、同二〇年には高官や學術技芸の士に限つて拝觀を許すこととなつた(和田軍一『正倉院案内』吉川弘文館 平成八年二月)。